

パンデミック禍におけるケア その現状と課題

企画・司会：江藤双恵（会員・獨協大学）

パンデミック禍においても、女性にケア責任が押し付けられていることに変わりはないが、立場や状況によってそれぞれに異なる課題があり、支援の方法は一通りではない。大切なのは、日本におけるマジョリティと想定される人々が営む世帯を普遍とせず、多様な人々の生活の実相を知ろうとする姿勢である。

報告1（沼田あや子）は、子どもが不登校になったときには多くの母親が仕事を辞めており、女性がケア役割を背負うパターンがここでも繰り返されていることに注目する。コロナ禍以降、高まる社会不安のしわ寄せを、家族という自助ユニットが引き受けているかのようなのである。傷ついた子どものケアと、それを引き受ける母親のケアをコミュニティで支える道はあるのか。さまざまな家族のかたち、ケアのあり方と比較しながら議論をする。

報告2（小野寺善子）は、子どもがコロナに感染したときの自身の経験を中心に語る。ろう者にとって、聴者中心の社会に合わせる生活は口話主義のろう教育からすでに始まっていて、母となり子育てしている中でも日々情報格差に直面している。コロナ禍の困りごとをろう母親の立場から考える。

報告3（木曾恵子）では、タイ東北部農村におけるパンデミック禍の子（孫）育てについて考察する。地方農村出身の労働者が移動先で子育てをするのは困難を極めており、乳幼児期の子どもを祖父母に預けるなど、農村の家族にそのケアを依存する傾向がある。パンデミック以降の現地調査の結果も合わせて報告し、日本におけるさまざまな状況の子育てと比較しながら議論をする。

2022年の大会では、1970年の国際女性学会（当時）設立以来、はじめてろう者の参加が実現する。本シンポジウムでは、小野寺善子さんの報告を聴者聴衆に理解してもらうのはもちろんのこと、ろう者の聴衆にも積極的に参加してもらいつつ、沼田あや子さんの不登校児母の事例とろう母親の事例を比較する。また、東北タイの事例を全体で共有して日本社会を相対化することによって、日本の女性が直面しているケアの問題、女性の生きづらさについて考える機会をもつ。

沼田あや子（国際ジェンダー学会会員・白梅学園大学）「不登校問題が家庭に及ぼす影響 ～コロナ禍の不安に対するケア役割について」

小野寺善子（NHK 手話ニュース・キャスター、国立障害者リハビリテーションセンター学院 手話通訳学科 非常勤講師）「ろう母親が直面するマジョリティ社会のとの軋轢 —新型コロナ禍での経験から」

木曾恵子（国際ジェンダー学会会員・日本学術振興会特別研究員）「ケアをシェアする —東北タイ農村におけるパンデミック禍の子（孫）育て」